

『新潮 世界美術辞典』の項目見出しを 基にした主題語の抽出と分析

藤 川 哲

1. はじめに
2. 「主題語」と「主題を表す項目」の区別
3. 主題・画題を表す見出し語の抽出
 - 3.1 キリスト教美術に関する主題語
 - 3.2 仏教美術に関する主題語・禅宗絵画に関する主題語・道釈画に関する主題語
 - 3.3 中国画に関する主題語
 - 3.4 やまと絵・漢画に関する主題語
 - 3.5 古代ギリシアに関する主題語
 - 3.6 古代ローマ以降の西洋美術に関する主題語
 - 3.7 エジプト・西アジア・インド・カンボジア・朝鮮・メキシコに関する主題語
 - 3.8 世界各地の美術に共通する主題語
 - 3.9 神話・聖典・叙事詩・図像書
4. 抽出手順の振り返り
5. 主題語の分析
6. おわりに

1. はじめに

『新潮 世界美術辞典』は、新潮社より1985年2月に発行された美術辞典である。その「序」に曰く、1976年の同社創立80周年の記念出版の一つとして企画されたもので、各界第一線の研究者、芸術家らの協力のもと、1970年より雑誌『芸術新潮』に連載され、連載終了後に各項目解説の改訂および、約2,500項目の増補を経て完成された。日本で出版される世界美術辞典であることを意識して、「日本から見た世界」を編集方針とし、先史から現代まで古今東西の約17,000項目を収録する。「全世界の項目を真にグローバルにとらえた」と同時に「日本と東洋の項目に相当な力点がおかれている」という特徴を現代風に捉え直せば、グローバルな世界美術辞典と言えるだろう。

この『新潮 世界美術辞典』の雑誌連載時のタイトルが「世界美術小辞典」である¹⁾。

同「小辞典」について、ある論文で「全体の項目数は、約16,000項目で、3,200項目程度が主題を表すとみられる。」という記述を目にした²⁾。グローバルな美術辞典として完成された『新潮 世界美術辞典』に収録されている主題を表す項目には、いったいどのようなものが網羅されているのか、関心を抱いた。そこで、同書の1頁目の「ア」から、すべての項目見出しをエクセルの表に入力し、解説文を拾い読みして、主題を表すと判断した項目を色分けしつつ整理した。1647頁の「ン」に至るまでに入力した項目数は、合計16,965項目で、そのうち、解説文を有しない項目が、2,314件あった。これらの解説文を有しない項目とは、「青騎士⇒ブラウエ・ライター、デア」のように訳語／原語の言い換えに由来する参照項目や、「アケイロピエトス⇒アヒロピエトス」のようなカタカナ表記の揺れに由来する参照項目、「赤楽⇒楽焼」、「アル=ハーキムのモスク⇒カイロ」のようにより広い概念や都市名でまとめて解説される場合の参照項目などである。

項目見出しの合計16,965から、解説文を有しない項目数2,314を差し引いて得られる、解説文を有する項目の総数は14,651となった³⁾。

2. 「主題語」と「主題を表す項目」の区別

本稿では、『新潮 世界美術辞典』において、解説文を有する14,651項目の見出しの中から「主題語 (Subject Term)」に相当する見出しを抽出することを試みる⁴⁾。この場合、主題語は、美術作品を対象とした情報システム上で利用可能な検索語となり得るもののうち、特に〈作品主題を表す見出し語〉として限定的に捉える。つまり、作品検索システムにおいては、「作者」、「技法」、「様式」、「材料」、「所蔵美術館」等を特定する語群も「主題語」となり得るが⁵⁾、これらの語群は、言葉の一般的な意味で、美術作品の主題を表す語とは言えない。

例を挙げれば、染料や色名を表す「藍」、ドイツの建築家「アイアマン、エーゴン」、刀装の形式を表す「合口拵」などの解説文は、いずれも美術作品の主題を説明するものではない。これに対し、レオナルド・ダ・ヴィンチの未完の壁画の主題と説明される「アンギアーリの戦い」や、中国故事人物画の画題である「飲中八仙」、キリスト教美術の主題の一つと記されている「エクレスシアとシナゴーガ」などは、明らかに美術作品の主題を表す項目見出しであると言える。

こうした美術作品の主題として解説される項目以外にも、『新潮 世界美術辞典』には「主題を表す項目」が多数収録されている。仏教の尊格である「愛染明王」、ロー

マ皇帝の「アウグストゥス」、伝説上の動物「一角獣」は、それぞれ明王や皇帝や動物であると同時に、仏像や仏画、大理石像、写本挿絵やタピスリーなどによって表現された主題でもあり、解説文にも、そうした作例への言及がある。こうした項目見出しは、さらにさまざまな地域の神々や王、キリスト教の聖人や預言者、各地の伝説に登場する想像上の生き物などを含めると膨大なリストとなり、試みにグループ化してみたところ、649項目になった⁶⁾。また、遺跡や都市、建築物等も多数、項目見出しとなっているが、それらの中には、平山郁夫のシルクロード・シリーズに描かれた「パルミューラ」、カナレットを始め多くの画家が描いた「ヴェネツィア」、ドロナーの油彩やアンリ・リヴィエールの版画に描かれた「エッフェル塔」など、「主題を表す項目」と見なすべき例が散見される。

さらに、「歌仙絵」や「騎馬像」、「世界図」といった項目は、それぞれ絵や彫刻、地図など、表現形式に力点を置いて解説されているが、後述するように、「～絵」、「～像」、「～図」といった形で表わされる項目の中には、表現内容に力点を置いて解説されている項目も少なくない。それらは「主題語」に含めた。

本稿では、『新潮 世界美術辞典』の項目見出しの中から、上述の、神仏や王、聖人や想像上の生き物、そして遺跡や都市、建築物等について解説する「主題を表す項目」、および、一般にジャンル名や表現形式と呼ばれる「～絵」、「～像」、「～図」といった形で表わされた項目のうち、内容よりも形式の解説に力点が置かれた項目を除外して、〈作品主題を表す見出し語〉としての「主題語」を抽出し、その特徴を分析する。

3. 主題・画題を表す見出し語の抽出

『新潮 世界美術辞典』の解説文には、表記の揺れが存在する。14,651項目におよぶ解説文が、それぞれ独自の専門分野を持つ複数の研究者によって執筆されていることを考えれば当然のことではある。そうした中でも、キリスト教美術の主題については、解説文が「キリスト教美術の主題の一つ」といった文言で始められるなど、記述スタイルに統一性が認められた。同様に、仏教美術の画題、禅宗絵画の画題、道釈画の画題等についても、解説文の冒頭に端的に示されている場合が複数確認できた（数例、解説文の途中で記されている場合もあった）。

「主題」および「画題」については、小学館の『日本国語大辞典』（第2版）によれば、前者の初出が1895年の上田万年『国語のため』、後者の場合も1899年の国木田独歩『無窮』となっており、開国以後の新造語ないし翻訳語であると理解される。前者につい

ては「主要な題目。」が第一義で、「ある事柄で中心となる問題。主たるテーマ。」が次に挙げられ、第三義として、「小説、芝居、映画など芸術作品で、作者の主張の中心となる思想内容。テーマ。」という語釈が見られる。また、後者については「絵画の題名。また絵画のテーマ。」のみの語釈となっている。本稿では、『新潮 世界美術辞典』の項目解説における「主題」、「画題」をテーマ (Theme) の訳語として同列に扱い、主題語を抽出する際の目印とする。

3.1 キリスト教美術に関する主題語

解説文中に「キリスト教美術の主題」、または「キリスト教美術の主題の一つ」と明記されている項目見出しを数えると64項目あった。

この64項目に、次の14項目を加えた78項目が、キリスト教美術に関する主題語の候補である。先ず「キリスト教美術にあらわれる象徴像の一つ」である「魚」、そして「キリスト教美術で神の存在を象徴的に表現する…図像」と説明される「エティマシア」、さらに「初期キリスト教美術…にその例が多い」と解説されている「オーランス」ほか、「遅くとも9世紀初頭には画像化された。」と解説される「キリストの系譜」、「多数の画像を生んだ」と紹介されている「キリストの公生涯」、「無数の作例を生んだ。」という言及のある「キリストの幼年時代」、「キリスト教美術の重要な象徴像の一つ。」と解説されている「仔羊 (神の)」、キリストが処刑された場所「ゴルゴタ」、「各種の教会芸術は、ほとんど何らかの形でこれらの秘跡と関連して発展してきた。」と解説される「サクラメントゥム」、「キリスト教美術は早くからその図像表現を行っている。」として作例解説を行っている「三位一体」、「しばしばキリスト教図像表現の基底を成している。」と解説文を締めくくっている「聖餐」、聖書に記された悪徳と頹廢の都市「ソドムとゴモラ」、「キリスト教美術で、画題として取りあげられ…」と明記されている「バベルの塔」、そして「キリスト教美術に頻繁にあらわれる象徴像。」と説明される「良き牧者」の14項目である。

リスト1 キリスト教美術に関する主題語の候補 (78項目) : 調整前 (下線を引いた項目以外は、解説文で「キリスト教美術の主題」と明記されている)

アナスタシス／魚／エクレシアとシナゴーガ／エジプトへの逃避／エッケ・ホモ／エッセイの木／エティマシア／エルサレム入城／オーランス／恩寵の座／カナの婚礼／姦淫の女／奇跡の漁り／キリストの系譜／キリストの公生涯／キリストの裁判／キリストの出現／キリストの昇天／キリストの洗礼／キリストの逮捕／キリストの復活／キリストの奉献／キリストの埋葬／キリストの宮浄め／キリストの鞭打ち／キリストの幼年時代／ゲッセマネ／降誕／仔羊 (神の)／ゴルゴタ／最後

の審判／最後の晩餐／サクラ・コンヴェルサツィオーネ／サクラメントウム／サマリアの女／三位一体／十字架降下／十字架荷い／十字架の道／受胎告知／受難／聖家族／聖餐／聖墳墓詣り／聖母の死／聖母の戴冠／聖霊降臨／ソドムとゴモラ／磔刑図／デシス／ディスプータ／天国の鍵／トマス
の不信／ノリ・メ・タンゲレ／博士達の中のキリスト／バベルの塔／ピエタ／被昇天（聖母の）
／羊飼の礼拝／ベツレヘムの幼児虐殺／ヘーリオドーロス／変容／放蕩息子／訪問／マイエスタ／
マイエスタス・ドミニ／マギの礼拝／マグダラのマリア／マグニフィカトの聖母／マーテル・ドロ
ローサ／貢の銭／無垢受胎／ヨアキムとアンナ／良きサマリア人／良き牧者／楽園追放／ラザロ／
律法の授与

上に抽出した78項目中、5つの項目を網掛けで強調した。「エクレシアとシナゴーガ」は、それぞれキリスト教会とユダヤ教会の擬人像である。また、「ヘーリオドーロス」は、『新潮 世界美術辞典』の解説文では、まず「セレウコス朝のアジア州王の財務官。」と説明され、次に「かれに降った神罰はキリスト教美術の主題の一つ」と続く。そして「マグダラのマリア」と「ラザロ」については、それぞれ『新約聖書』に登場する女性、『新約聖書』中の人物と説明したのちに、キリスト教美術の主題として位置づけている。また、「ヨアキムとアンナ」の項目は、キリスト教美術の主題としての解説文になっているが、同時に聖母マリアの両親の名前でもある。つまり、これら5つの項目は、「キリスト教美術の主題」として説明されていると同時に、擬人像も含めて、いずれも人物についての解説を伴う。

ところで、上のリストに含めなかった「キリスト」は、「その表現はキリスト教美術の中核を成す。」と説明され、「聖母」は、「キリスト教美術において、聖母の図像はキリストの図像に次いで重要な位置を占め…」と解説される。「キリスト教美術の主題」という文言がなくとも、重要主題であることは言を俟たない。同様に、「ダビデ」、「モーセ」、「ヨセフ（キリストの養父）」らについても、キリスト教美術の重要な主題として扱われることに変わりはない。しかしながら、上述の「主題語」と「主題を表す項目」の区別に従って、今回、これらの「人名」と目される項目については、「主題語」としては抽出しない。上の5項目について見れば、ヘーリオドーロス、マグダラのマリア、ラザロの3項目が該当から外れる。他方、「エクレシアとシナゴーガ」、「ヨアキムとアンナ」のように複数の人名が組み合わせられたキリスト教関連の項目見出しについては、「キリスト教美術の主題」という文言が解説文にない場合でも、本カテゴリーに含むことにした。また、この原則を少し拡張して「使徒」や「シビュラ」などのように、特定の人物ではなく「類」として解説されている項目見出しも含めた。こうして、上記の他に「アダムとエバ」、「アンナと聖母子」、「カインとアベル」、「コスマスとダ

ミアヌス]、「サムソンとデリラ」、「使徒」、「シビュラ」、「四福音書記者」、「十四救難聖人」、「聖人」、「聖母子」、「大天使」、「天使」、「トビアとトビト」、「預言者」の15項目を追加で抽出した。結果、78項目から3項目を除外して15項目を追加することとなり、キリスト教美術に関する主題語は、以下の90項目となった。

リスト2 キリスト教美術に関する主題語 (90項目) : 調整後

アダムとエバ／アナスタシス／アンナと聖母子／魚／エクレシアとシナゴーガ／エジプトへの逃避／エッケ・ホモ／エッサイの木／エティマシア／エルサレム入城／オーランス／恩寵の座／カインとアベル／カナの婚礼／姦淫の女／奇跡の漁り／キリストの系譜／キリストの公生涯／キリストの裁判／キリストの出現／キリストの昇天／キリストの洗礼／キリストの逮捕／キリストの復活／キリストの奉献／キリストの埋葬／キリストの宮浄め／キリストの鞭打ち／キリストの幼年時代／ゲッセマネ／降誕／コスマスとダミアヌス／仔羊（神の）／ゴルゴタ／最後の審判／最後の晩餐／サクラ・コンヴェルサツィオーネ／サクラメントウム／サマリアの女／サムソンとデリラ／三位一体／使徒／シビュラ／四福音書記者／十字架降下／十字架荷い／十字架の道／十四救難聖人／受胎告知／受難／聖家族／聖餐／聖人／聖墳墓詣り／聖母子／聖母の死／聖母の戴冠／聖霊降臨／ソドムとゴモラ／大天使／磔刑図／デイス／ディスプータ／天国の鍵／天使／トビアとトビト／トマスの不信／ノリ・メ・タンゲレ／博士達の中のキリスト／バベルの塔／ピエタ／被昇天（聖母の）／羊飼の礼拝／ベツレヘムの幼児虐殺／変容／放蕩息子／訪問／マイエスタ／マイエスタス・ドミニ／マギの礼拝／マグニフィカトの聖母／マーテル・ドローローサ／貢の銭／無垢受胎／ヨアキムとアンナ／良きサマリア人／良き牧者／預言者／楽園追放／律法の授与

追加した15項目のうち、「アダムとエバ」や「アンナと聖母子」といった複数の人名の組み合わせは、宗教的な教義や聖書の物語など、特定の文脈や場面を表すと同時に、同一画面に描かれたり、同一の空間に彫像として並べられることによって、「十二使徒」や「十四救難聖人」と同様に、個々人が持つ意味の単純な総和を超えた意味を獲得する点が特筆される。

3.2 仏教美術に関する主題語・禅宗絵画に関する主題語・道釈画に関する主題語

「キリスト教美術の主題」と明記された主題語候補が64項目も数えられた前項と比べ、「仏教美術の画題」と明記された項目は、「仏教絵画の主題」や「浄土教美術の画題」と合わせても「生死輪」、「捨身飼虎」、「施身聞偈」、「二河白道」の4項目のみであった。該当項目数が少ない理由の一端は、「愛染明王」や「阿修羅」、「阿弥陀」などの尊格についての項目見出しを、人名・地名等に関する「主題を表す項目」として、本

稿の分析対象から除外していることにもあるが、先にも述べた通り、「主題」という言葉自体が明治以来の新造語ないし翻訳語であることから、仏教美術等の解説文に馴染みが薄いためではないかと考えられる。

そこで、「主題」と明言されてない項目からも、解説文の内容に照らして主題と見なすことが可能な事例を、「3.1キリスト教美術に関する主題語」で抽出した項目の解説文内容を参考にしながら、積極的に追加した。仏教の世界観に由来する「極楽浄土」、「十界図」、「須弥山」、「浄土」の4項目、仏伝や仏教説話に由来する「阿弥陀浄土変相」、「阿弥陀来迎図」、「猿猴捉月」、「釈迦八相」、「涅槃変相」、「譬喩説話図」、「仏教説話図」、「仏伝図」、「変相」、「本生図」、「来迎」、「牢度叉変相」の12項目、そして複数の尊格等の総称的意味を持つ、「九体阿弥陀」、「九品来迎」、「五大明王」、「五大力菩薩」、「五智如来」、「五秘密」、「五仏」、「金剛力士」、「三十番神」、「三十三天」、「四天王」、「釈迦三尊」、「十大弟子」、「執金剛神」、「十二神将」、「十二天」、「十六善神」、「十六羅漢」、「浄土五祖」、「真言八祖」、「神将」、「千仏」、「祖師」、「仁王」、「二十八部衆」、「二天」、「如来」、「八部衆」、「八供養菩薩」、「八天」、「波羅蜜形」、「風神・雷神」、「仏母」、「菩薩」、「本地仏」、「明王」、「羅漢」、「羅刹」、「六観音」の39項目、さらに特殊な項目見出しとして、空海や親鸞自身ではなく、その画像や彫像の解説として立項されている「弘法大師像」と「親鸞聖人像」の2項目と、観音の一図様として立項されている「水月観音」の1項目を、前述の4項目に加えて、合計62項目とした。

リスト3 仏教美術に関する主題語 (62項目)

阿弥陀浄土変相／阿弥陀来迎図／猿猴捉月／九体阿弥陀／九品来迎／弘法大師像／極楽浄土／五大明王／五大力菩薩／五智如来／五秘密／五仏／金剛力士／三十番神／三十三天／十界図／四天王／釈迦三尊／釈迦八相／捨身飼虎／十大弟子／執金剛神／十二神将／十二天／十六善神／十六羅漢／須弥山／生死輪／浄土／浄土五祖／真言八祖／神将／親鸞聖人像／水月観音／施身聞偈／千仏／祖師／仁王／二河白道／二十八部衆／二天／如来／涅槃変相／八部衆／八供養菩薩／八天／波羅蜜形／譬喩説話図／風神・雷神／仏教説話図／仏伝図／仏母／変相／菩薩／本地仏／本生図／明王／来迎／羅漢／羅刹／牢度叉変相／六観音

ところで、「禅宗絵画の画題」、あるいは「道釈画の画題」と説明される項目については、「散聖図」と総称される世捨人を画題とする項目の解説を通して、カテゴリー構成要素の不統一が見られる。言い換えれば、カテゴリー間の排他性が揺らいでいる。具体的には、散聖図の例として挙げられ、かつ独立した項目見出しが立てられている「寒山・拾得」、「蛄子」、「鳥窠」、「猪頭」、「布袋」の中国僧について、それぞれの解

説を読むと、鳥窠と布袋は、「道釈画の画題」とされ、他の3項目は、「禅宗絵画の画題」と説明されているのである。しかし、本稿では上記5項目のうちの「寒山・拾得」以外を、人名・地名等に関する「主題を表す項目」として分析対象から除外するため無視できる。したがって以下では、「禅宗絵画の画題」と「道釈画の画題」を互いに独立したカテゴリーとして扱う。

「蜆子」、「鳥窠」等の単独の人物解説を除くと、「禅宗絵画の画題」と明記された項目は13項目、「道釈画の画題」と記載されている項目は11項目あった。禅宗絵画に関する主題語には、「禅宗祖師像」や、禅による心の機（はたらき）を主題とする「禅機図」、禅僧と俗人の問答の様子を描く「禅会図」も加えて16項目とし、道釈画に関する主題語には、2人の仙人を双幅で描く作例について解説した「蝦蟇・鉄拐」を加えて12項目とする。

リスト4 禅宗絵画に関する主題語（16項目）

慧可断臂／寒山・拾得／香巖擊竹／三平開胸／十牛図／浄瓶踢倒／禅宗祖師像／禅機図／船子・夾山／禅会図／朝陽・対月／丹霞烧仏／洞山渡水／南泉斬猫／葉山・李翱／靈昭女

リスト5 道釈画に関する主題語（12項目）

蝦蟇・鉄拐／五百羅漢／三官図／三教図／四睡図／地藏十王／十王図／出山釈迦／縄衣文殊／朝元図／天台石橋／渡水僧

ここで、「散聖図」や「道釈画」といった総称的な項目見出しについて考察を加えておきたい。『新潮 世界美術辞典』では、散聖図を「道釈画の一種。」と説明している。この場合、主題語となるべきは、世捨人の尊称である「散聖」と考えるのが道理であろう。ところで、これまでに「キリスト教美術の主題」、「仏教美術の画題」、「禅宗絵画の画題」、「道釈画の画題」と4つのカテゴリーについて検討してきたが、実は、それぞれに「磔刑図」、「十牛図」、「三官図」、「三教図」、「十王図」、「朝元図」といった「～図」という項目名が含まれており、「～の主題」または「～の画題」として解説されている（「～の画題」と明記されていないにも関わらず、内容から判断して追加した「禅機図」、「禅会図」をここでは一旦除外しておく）。これは、日本語の用法において、主題そのものを表す語と主題を表した作品を総称する語が厳密には区別されていないことを意味する。試みに、抜き出した6つの項目について、「図」を除いた場合、主題語として成立するかを確認してみればよい。「磔刑」、「三官」、「三教」、「十王」は、「磔刑像」、「三官像」、「三教像」、「十王像」のように、彫像としての表現を想定すること

も可能で、独立して主題語化することが可能であることがわかる。これに対して「十牛図」と「朝元図」は、まさに図像として表現されることしか想定できず、「十牛図」、「朝元図」のまま、主題語と作例の総称とを兼用するものとして扱わざるを得ない（この点では結局、「禅機図」、「禅会図」も同様である）。

これに絡めて、「画題」に「絵画の題名」の意味が含まれることも再考しておくべきであろう。佐々木健一『タイトルの魔力』に拠れば、作品の「タイトル」を画家が決めるということ自体、18世紀以降のヨーロッパにおいて徐々に浸透するようになった比較的新しい習慣である⁷⁾。プレートに記されたタイトルが額縁上に据え付けられることによって、タイトルは作品と一体的存在となったが、この一体化を促したのは美術館制度の整備であり、またそれに先行する形でのサロン展での展示方法の整備であった⁸⁾。世界美術の長い歴史を思えば「主題」と「画題 (=タイトル)」、そして「主題語」の分離作業は、むしろこれからの課題と考えられるのである。

他方、「道釈画」は主題語とは見なし得ない。「道釈」の語義は「道教と仏教」で独立した語句であるが、道釈画は「仏教と道教」を画題としているのではなく、釈迦や道教の諸神、仙人等を画題とした絵の総称であるからである。

このように考えてくると、「～図」、「～画」、そして「～絵」、「～像」という形をとる見出し項目は、表現内容を指すこともあり、そのまま便宜的に「主題語」と見なせる場合と、つねに表現形式を指し、総称的な項目見出しとして「主題語」から区別されるべき場合とを、一つ一つ個別に判断しなければならないことが明らかとなる。「十界図」、「譬喩説話図」、「仏伝図」、「本生図」などは、この前者にあたる。

3.3 中国画に関する主題語

『新潮 世界美術辞典』の項目解説文には、「古代中国の画題」、「中国画の画題」、「中国の人物画の画題」、「中国の故事人物画の画題」、「中国の人物山水画の画題」、「中国の山水画の画題」、「中国の故事山水画の画題」、「中国の風俗画の画題」、「中国花卉画の画題」など細分されているが、本稿ではまとめて一つのカテゴリーとして取り扱う。中国画の画題で日本に取り入れられたものは大変多く、「中国画の画題」は、中国発祥の画題を意味することとなる。中には「樹下人物図」のように中央アジアにも作例が見られる画題もここに含んでいる。また、文人画の画題として説明されている「墨竹」、「墨梅」、「墨蘭」も中国発祥であることからここに加えた。主題語として挙げられるのは次の104件である。

リスト6 中国画に関する主題語 (104項目)

飲中八仙／瀛山図／袁安臥雪／剡溪訪戴／屋木画／界画／画牛／窠石図／花鳥画／画馬／勸戒図／漢宮春曉／勘書図／觀潮図／觀瀑図／寒林図／九曜図／九老会図／胸中丘壑／許由・巢父／漁樂図／琴棋書画／孝経図／孝子伝図／耕織図／江南春／孔門十哲／故事山水／五祖／枯木図／崑崙山／歲寒三友／採芝図／載酒図／採薇図／採菱図／三皇五帝／詩意図／四君子／仕女図／七賢過関／十八学士／周茂叔愛蓮図／樹下人物図／出行図／出塞図／招隱図／商山四皓／蕭湘図／蕭湘八景／昇仙図／職貢図／蜀山図／神仙山水／睢陽五老／西園雅集／清明上河／石勒問答／折枝花／洗象図／藻魚図／双松図／草虫画／蘇武牧羊／星宿／太真乘馬／待渡図／多子図／竹林七賢／賺蘭亭／長江万里／帝王図／天池石壁／天保九如／桃源図／桃季園図／読碑図／杜子美騎驢／売貨郎／伯夷・叔齊／蕃馬図／伏羲・女媧／伏生授経／福祿寿／平遠山水／蓬萊山／明皇幸蜀／墨竹／墨梅／墨蘭／毛詩図／輞川図／幽亭秀木／洛神賦図／蘭亭曲水／劉阮天台／竜虎図／翎毛画／列女伝／煉丹図／蓮池水禽図／樓閣山水／老子出関／盧鴻草堂

3.4 やまと絵・漢画に関する主題語

このカテゴリーには、「やまと絵の画題」または「やまと絵系の画題」として解説されている「宇治橋網代図」、「歌合絵」、「四季絵」、「雪月花」、「月次絵」、「浜松図」の6項目に、「漢画の画題」または「漢画の故事人物画の画題」と解説されている「漁樵問答」、「虎溪三笑」、「四愛図」、「二十四孝図」の4項目を加え、さらに上述の中国発祥の画題に含まれない、日本独自の画題等26項目を加えて、合計36項目を抽出した。

リスト7 やまと絵・漢画に関する主題語 (36項目)

伊勢物語絵／犬追物／宇治橋網代図／歌絵／歌合絵／厩図／偃息図／近江八景／大原御幸／歌仙絵／賀茂競馬／漁樵問答／源氏物語絵／虎溪三笑／五節句／三平二満／四愛図／四季絵／七福神／聖徳太子像／職人尽図／書齋図／雪月花／太宗屏風／誰ヶ袖屏風／月次絵／東海道五十三次／渡唐天神／二十四孝図／浜松図／人麿像／富嶽図／舞楽図／屋島合戦／湯女／若宮神像

3.5 古代ギリシアに関する主題語

このカテゴリーには、「アポクシューオメノス」と「ディスコボロス」のように、「ギリシア彫刻の主題」と明記された古代ギリシアの彫刻に特有の主題2項目に加え、ギリシア神話を典拠とし、古代ギリシアの壺絵や浮彫等の作例にとどまらず、ギリシア以外でも近代に至るまで描かれ続けた主題等17項目を加えて、合計19項目とした。

リスト8 古代ギリシアに関する主題語 (19項目)

アポクシューオメノス／アマゾノマキアー／アルゴナウタイ／ギガンテス／ケンタウロス族／ゴル

ゴー／シュムプレグマ／僭主殺害者／ディオスクーロイ／ディスコボロス／トロイア戦争／ニュン
フェー／ネーレーイデス／バックナーリア／パラディオン／パリスの審判／ヘスペリデス／マイ
ナデス／ラピタイ族

3.6 古代ローマ以降の西洋美術に関する主題語

そして次の18項目が、明らかに西洋美術の主題に関する解説項目でありながら、上述の「3.1 キリスト教美術に関する主題語」にも「3.5 古代ギリシアに関する主題語」にも分類されない項目として残った。このうち、「自画像」についての解説文は、「画家が自分自身を描いた絵画。」という作品についての端的な定義から書き起こされるが、後半部分では、「のちにはほとんどの画家が試みる画題となった。」という記述で、「画題」としての位置づけも示されているため、表現内容をも指し示していると思われ、主題語に含めることとした。また「悪魔」については、ロマネスク美術に関する記述において、人魚、ケンタウロス、シーレーノス、ネーレーイデス等も含めて論じているため、「3.1キリスト教美術に関する主題語」の概念より広く捉えられるものと判断して、本カテゴリーに含めることとした。

リスト9 古代ローマ以降の西洋美術に関する主題語（18項目）

悪魔／アルルカン／アンギアーリの戦い／ヴェドゥータ／オダリスク／海景画／コメディア・デラ
ルテ／サーカス／サビーニーの女たち／自画像／死の勝利／死の舞踏／ヌード／ピエロ／美德と悪
徳／フェート・ギャラント／ブット／マハ

3.7 エジプト・西アジア・インド・カンボジア・朝鮮・メキシコに関する主題語

以上のように、解説文中で主題や画題であることが明示的な西洋、中国、日本の項目見出しを中心に抽出していった結果、独立のカテゴリーとして区分するには項目見出しの数のまとまりが比較的小さいと思われる、次の32項目が残った。内訳は、エジプトに関するものが9項目、西アジア7項目、インド11項目、カンボジア1項目、朝鮮3項目、メキシコ1項目である。

本カテゴリーに一括した項目群は、文化的背景が異なるため50音順にリスト化されることによって、繋がりが見えにくくなる。そこで、各項目を地域単位で解説しておく。エジプトに関する9項目のうち、「トリアド」、「オグドアド」、「エネアド」は、それぞれ三柱神群、八柱神群、九柱神群を意味する。これに生命力を表す「カー」、エジプトにおいて図像として確立した「ゾアティック」、魂を表す「バー」、国王の総称「ファラオ」、エジプト固有の作例の項目解説となっている「天空図」、王位更新祭の「ヘ

ブ=セド」を加える。「花卉画」は西アジア起源とされる。「鷹狩」は古代アッシリアに作例が見られ、「帝王狩獵図」は西アジアにおける伝統的な題材と説明されている。「帝王叙任式図」はメソポタミアやイランの作例についての解説であり、「七つの肖像」と「ホスローとシーリーン」、「ライラとマジヌーン」はペルシアのミニアチュールの主題として紹介されている。これらの7項目を西アジアに関する項目と数えた。インドに関する11項目は、ヒンドゥー教の7人の神々を指す「サブタ=マトリカー」、ヴィシュヌ神が姿を変えた権化を意味する「アヴァターラ」とシヴァの象徴「リング」、二神が一组で造形される「守門神」、三神一体説を表す「トリムールティ」、二神合体像の「ハリハラ」、ラマ教の男女抱合像「ヤブ=ユム」、一对の男女またはその性的結合を意味する「ミトゥナ」、仏教、ジャイナ教、ヒンドゥー教の精女の総称「アプサラス」、インドおよび仏教で天人・天女、または彼らが住む場所を指す「天」、および「飛天」である。「デーヴァラージャ」は、カンボジアで神格化された王を指す。朝鮮に関する3項目は、李朝時代に行われた契会場の写生図である「契会図」、金剛山を描いた「金剛山図」、吉祥図案の「十長生図」。そしてメキシコに関する1項目は、平民を意味する「マセワル」である。

リスト10 エジプト・西アジア・インド・朝鮮・メキシコに関する主題語 (32項目)

アヴァターラ／アプサラス／エネアド／オグドアド／カー／花卉画／契会図／金剛山図／サブタ=マトリカー／十長生図／守門神／ゾアティック／鷹狩／帝王狩獵図／帝王叙任式図／デーヴァラージャ／天／天空図／トリアド／トリムールティ／七つの肖像／パー／ハリハラ／飛天／ファラオ／ヘブ=セド／ホスローとシーリーン／マセワル／ミトゥナ／ヤブ=ユム／ライラとマジヌーン／リング

3.8 世界各地の美術に共通する主題語

さらに、『新潮 世界美術辞典』には「洋の東西を問わず…」、「ほとんどすべての民族・文明の美術にみられる…」、「人類が太古から…」といった表現で、特定の地域に限定されることなく、広く世界各地で確認される主題の項目見出しが12項目確認できた。これらは、これまでに分類してきたカテゴリーのように発祥地を一つの地域に限定することができない、世界各地の美術に共通する主題語と言える。

リスト11 世界各地の美術に共通する主題語 (12項目)

怪奇／月暦図／コスモロジー／地獄／終末思想／生命の泉／生命の樹／世界図／天地創造／人間像／鳩／楽園

3.9 神話・聖典・叙事詩・図像書

『新潮 世界美術辞典』には、日本神話や中国・朝鮮の神話、ギリシア神話等の項目見出しは存在しないが、「エジプトの神話」を始め、西アジアやインド、中南米等の神話については立項されている。そして、この「神話」に分類される項目の中には、「洪水神話」や「創世神話」、「太陽神話」などのように、特定の地域に限定されない、つまり前項の「世界各地の美術に共通する主題語」に含まれると思われる項目見出しが存在する。

ギリシア神話が立項されず、ギリシア神話の物語の中でも多くの作例を生んだ「トロイア戦争」や「パリスの審判」が立項されていることに照らして考えれば、エジプト、西アジア、インド等の神話は、それらの地域の美術作品に表された主題群に関して総合的に解説する項目見出しである、と見なされる。キリスト教美術に関する主題語の中に、「キリストの裁判」や「キリストの出現」、「キリストの昇天」が立項されている代わりに、「聖書」が立項されていないことも同様の編集方針に準拠するものであろうし、美術史学の深度の反映であるとも言える。そこで、これらを前項までの主題語のカテゴリーとは別立てでリスト化しておくことにした。

「聖書」の立項はないが、キリスト教美術に関しては、「黄金伝説」、「雅歌」、「詩篇」、「創世記」、「黙示録（使徒ヨハネの）」が立項されている。この5項目については、「3.1 キリスト教美術に関する主題語」ではなく、本カテゴリーに含める。また同様の観点から、ゾロアスター教の経典「アヴェスタ」、ヒンドゥー教の聖典に相当する一群の宗教書「プラーナ」、イスラーム教の聖典「コーラン」も、本カテゴリーに加えた。また多くの作例の典拠となったという観点から「アエネーイス」や「変身譚」、「楚辞」、ペルシアの叙事詩「ハムサ」も加えた。

さらに、仏典の中でも図像に関する情報を多く含む「阿婆縛抄」や、ビザンティン画家のための手引書である「アトス山の絵画提要」のような図像書も、本カテゴリーに含まれると判断した。

リスト12 神話・聖典・叙事詩・図像書（47項目）

アヴェスタ／アエネーイス／阿婆縛抄／アステカの神話／アトス山の絵画提要／インカの神話／インド神話／ウガリト神話／エジプトの神話／黄金伝説／お伽草子／雅歌／覚禅鈔／カクチケル年代記／仮名草子／儀軌／キターブ・アッ＝ディルヤーク／洪水神話／コーラン／詩篇／ジャータカ／シャー・ナーメ／シルパ＝シャーストラ／神秘の宝庫／前賢故実／創世記／創世神話／楚辞／太陽神話／タントラ／ハディース／ハムサ／ヒッタイト神話／プラーナ／ベアトゥスの黙示録注解書／別尊雑記／ペルシアの神話／変身譚／ポポル・ブフ／ポリフィロの夢／マハーバーラタ／マヤの神

4. 抽出手順の振り返り

前掲のリスト2から12まで、合計448項目を抽出することができた。抽出手順を振り返れば、次のようにまとめられる。

1. 解説文中に「キリスト教美術の主題」、または「キリスト教美術の主題の一つ」と明記されている項目見出しに着目して抽出。
2. 解説文において「画題」や「図像」、「象徴像」として定義されているもの、「画像化」についての言及や「作例」紹介のある項目見出しを追加で抽出。
3. 「1」で抽出した項目のうち、人名に相当するものを除外するとともに、複数のキリスト教関連の人名が組合せられた項目見出しを追加で抽出。
4. キリスト教美術について確立した手順に倣って、仏教美術に関する項目見出しを抽出。
5. キリスト教美術に関する主題語として抽出した項目の解説文の内容に照らして、該当する項目見出しを追加で抽出（宗教上の世界観を示すもの、教義を表す物語の情景、グループ化された崇拜対象など）。
6. 特殊な例として、祖師等の図像化について解説されている項目見出し（弘法大師像、親鸞聖人像）を追加で抽出（キリスト教美術については、キリスト像、聖母像といった項目見出しは立項されていない）。
7. 「中国の画題」、「中国画の画題」、「中国の…の画題」と明記されている項目見出しに着目して抽出。
8. 中国発祥の画題、文人画の画題を追加で抽出。
9. 「やまと絵の画題」、「やまと絵系の画題」、「漢画の画題」、「漢画の…の画題」と明記されている項目見出しに着目して抽出。
10. 日本独自の画題（=中国発祥の画題に含まれないもの）を追加で抽出。
11. 「～図」、「～画」、「～絵」、「～像」といった形で表わされる項目について、解説文の内容に即して表現形式に力点を置いて解説される場合と表現内容に力点を置いて解説されている場合とを区別。
12. 「ギリシア彫刻の主題」と明記されている項目見出しに着目して抽出。
13. ギリシア神話を典拠とする主題を追加で抽出。

14. 解説文の内容から判断して明らかに西洋美術の主題に関する項目見出しのうち、「キリスト教美術に関する主題語」にも「古代ギリシアに関する主題語」にも分類されなかった項目を、別立てで「古代ローマ以降の西洋美術に関する主題語」としてカテゴリー化。
15. エジプト、西アジア、インド、カンボジア、朝鮮、メキシコの美術の主題に関する項目（西洋、中国、日本に分類されなかった項目）を一括してカテゴリー化。
16. 解説文中に「洋の東西を問わず…」、「ほとんどすべての民族・文明の美術にみられる…」、「人類が太古から…」といった表現で説明されている特定の地域に限定されない主題を独立させてカテゴリー化。
17. 個別の主題や画題よりやや広い概念と目される「神話」や「聖典」に加え、叙事詩や図像書など、作品の典拠について解説している項目見出しを一括してカテゴリー化。

以上の手順は簡明を旨として記述したが、実際に作業を行っていく上では、遡及的な追加や削除、カテゴリー間の項目移動と調整を行った。特に手順11に記した通り、キリスト教美術に関する「主題」と中国・日本に関する「画題」をリスト化する中で、解説文の内容に即して、「総称的な項目見出し」として「主題語」とは別にリスト化し、本稿には記載しなかった項目が80以上あった（あぶな絵、浮絵、浮世絵など）。また、手順14以降の「残余」に相当する部分のカテゴリー化作業を通して、それ以前に設定した各カテゴリー間の整合性を再検証する機会が多かった。こうした追加、削除や移動と調整の作業が必要とされた理由は、一つにはすでに述べた通り、「主題」という概念自体、日本語としては比較的新しいものであり、また「画題=タイトル」という概念について見れば、ヨーロッパにおいても近代的な美術館の整備とともに要請された「制度」である上、私たちが検索システムというさらに新しい時代の要請に従って、この制度を流用しようとしている点に求められる。また今一つには、各項目の解説がそれぞれ異なる執筆者によって執筆されており、表記の揺れが存在することから、「該当する／該当しない」、「含まれる／含まれない」という判断を他の項目や項目群全体との比較を通して行う必要があったという点に帰することもできるが、より本質的には、分類という作業自体が部分と全体との往復運動なしには成立しないためである、ということができらるだろう。

5. 主題語の分析

『新潮 世界美術辞典』の項目解説の内容を一つ一つ吟味しながら、448項目を総合的に分類する作業を通して、〈作品主題を表す見出し語〉としての「主題語」の特徴を把握するよう努めた。本稿では、神仏や王、聖人や想像上の生き物、そして遺跡や都市、建築物等について解説する項目見出しを候補から外した上で主題語を抽出したが、それによって、抽出された主題語群の指示対象は、物語の一場面や行為の情景などであることが多くなった。また、主題語も言葉である以上、語彙の網目の中に存在し、階層化された構造による把握を予感させる。そして、私たちの語彙が有限である以上、流用や兼用によって規則性を逸脱する例が紛れ込む。こうした特徴をまとめると、次のようになる。

1. 【**典拠との照応性**】（特に人名や地名を除いた場合）主題語の多くは物語の一場面や行為の情景を表しており、その解説文は典拠の紹介となっている。
2. 【**階層性**】西洋美術、特にキリスト教美術の主題に関する情報が最も細分化しており、次いで東洋画の画題に関する情報が豊富であるが、中国と日本を除く非西洋圏（エジプト、西アジア、インド、中南米）については、「～の神話」のような大きな括りでまとめられ、エジプト以外のアフリカのように主題を解説する項目見出しが立てられていない地域もある。
3. 【**拡張性**】主題語の中には、「～図」、「～画」、「～絵」、「～像」のように作品の形式を表す語と組み合わせられている用語が、内容を表すものとして定着している例があり、表現形式やジャンル名を表す用語は、人名や地名などと共に主題語の語彙の拡張領域と見なすことができる。

以上、主題語について「典拠との照応性」、「階層性」、「拡張性」と3つの特徴を指摘したことが本稿の眼目である、とひとまずは言える。だが、むしろ、『新潮 世界美術辞典』の16,965項目の解説を通読している中で得られたささやかな気づきや発見の方に一層大きな意味があるのかも知れない。例えば、本稿では、「アダムとエバ」のように複数の人名が組合せられたキリスト教関連の項目見出しを主題語に含めるとともに、仏教美術や中国画においては「九体阿弥陀」や「孔門十哲」のように複数の尊格や人物を一組の存在として名指す項目見出しを積極的に追加した。そして再びキリスト教美術についても、「四福音書記者」や「十四救難聖人」が、同様の意味を担う候補として注意を引いた。こうした一連の作業を通して、これらの主題語は、個々人

が持つ意味の単純な総和とは別次元の意味を有しているということに気がついたが、それは「クラス写真」への連想を介して、一段深いものとなった。

私たちが学生時代に撮影したクラス写真は、通常、級友の顔を確認するためのものとして利用されるが、他方では、「2-A」や「3年3組」といった「クラス」を表象するものでもある。教室での日々の生活という実態はあるといえども、「私たちのクラス」や「隣のクラス」のイメージは頭の中に形成される。かつて吉本隆明が提示した「共同幻想」のような、観念的存在である。

こうした認識の地平に立てば、「主題を表す項目」として本稿で最初に除外した「アウグストゥス」のように、かつて実在した人物や、「パルミューラ」、「ヴェネツィア」、「エッフェル塔」のように現在も存在している都市や建物も、「愛染明王」や「一角獣」と同様に、頭の中にイメージとしての存在領域を持っている、と議論できる。しかし実際、前者の歴史的人物や実在する都市に関する『新潮 世界美術辞典』の解説文は、美術作品に表現された「主題」というよりも、実在物としての解説に力点が置かれている。こうした項目を「主題語」に含めるために、思考実験として、実在物としての「アウグストゥス」や「ヴェネツィア」とは別に「アウグストゥス像」や「ヴェネツィア像」といった別項を設け、美術作品に表されたイメージ存在としての解説文を書き起こす、ということも想定可能ではある。わずかな例だが、「空海」や「聖徳太子」とは別立てで「弘法大師像」と「聖徳太子像」が立項されている。またこれらとは対照的に、「親鸞聖人像」や「人麿像」が解説される代わりに「親鸞」や「柿本人麿」は立項されていない、といった例も見られる（「柿本人麿」は「人麿像」への参照見出しとなっている）。結論的には、汎用性を旨とした『新潮 世界美術辞典』は「主題語解説辞典」ではないのであるから、歴史的人物や実在する都市に関する項目が、現実的な存在として解説され、特殊な例を除いて「～像」といった別項が設けられないことは、むしろ当然のあり方であると言える。他方、上記「主題語」の「拡張性」にまとめたように、「磔刑図」によって、磔刑の場面を描いた絵画作品と、磔刑の主題を表すがごとく、私たちの身の回りのものを名指す語彙の多くが、実体と観念的存在との両方を指し示すことができる、ということが了解されるのである。その分かれ目は、解説文の力点の置き方、即ち、物事の捉え方にある。

6. おわりに

上に見てきた美術作品の主題とは完全には重ならないが、『日本十進分類法』（新訂

9版)には、図書の主題分類について以下のような言及がある。

「情報内容は知識であり、あらゆる知識を網羅した仮想空間〈知識の宇宙〉の中で考えれば、各図書の情報内容はその部分または断片にすぎない。この部分としての知識を形成する核となる内容を主題という。主題は人物、事象、空間上の場所、時系列の過程、あるいは具体的活動、他方では抽象的な概念まで含んでいる。」⁹⁾

また、2013年のヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展では、「百科事典的な宮殿 (Il Palazzo Enciclopedico)」を表題に、アウトサイダー・アートに着目しながら、さまざまな地域の美術表現を集めた企画展が開催された。企画展の表題は、マリノ・アウリーティ (1891-1980) によって、1955年にアメリカ特許局のために構想・製作された建築模型《世界の百科事典的な宮殿 (Il Palazzo Enciclopedico del Mondo)》から採られたもので、現代の大型国際美術展の比喩となっている。企画者のマッシミリアーノ・ジョーニは、図録のエッセイで次のように述べている。

「ビエンナーレ・モデルは無限に広がる現代美術の世界をひとつの場所に集約しようという不可能な欲望に根ざして、アウリーティの夢と同様、今から見れば眩暈がするほど非現実的な仕事である。」¹⁰⁾

『日本十進分類法』の編者が想定している〈知識の宇宙〉と、ジョーニが現代美術についてアウリーティに事寄せて描き出した「無限に広がる現代美術の世界」とは、「主題分類」という観点で結びつけて考えることができる。同じジョーニは、2004年に企画者の一人として参加した国際美術展「マニフェスタ5」においても、「この未開拓な闇 (This Wild Darkness)」という表題で、アートによって表現される内面世界についての語彙が、時に現実世界よりも複雑で、いまだ未開拓のままであることを言及していたのみならず¹¹⁾、同展の記者会見の場でも、「現代美術を記憶、感情、強迫観念といったテーマのもとに捉え直す必要がある」といった意味の発言をしていた¹²⁾。

本稿では、グローバルな現代美術の主題分類システムを構築する手始めとして、『新潮 世界美術辞典』から主題語に該当する項目見出しを抽出する作業を行い、その特性を分析した。主として近代以前の美術の主題解説が、物語の一場面や行為の情景、即ち、宗教的伝記や説話、神話や故事、叙事詩や物語などの対応箇所の紹介が中心となっていることを議論の出発点に据えるならば、現代美術の主題分類の困難さは、作例の多くが既存の〈物語〉を参照するものではない点に求められる。この困難を打破

するために、美術研究における「作品主題」という考え方自体の出現と、その変遷の歴史、概念の広がりを再点検した上で、現代美術における主題解釈の可能性を、具体的な作例に即して探らなければならない。

註

- 1) 『芸術新潮』第241号(1970年1月)～第321号(1976年9月)。「西洋編」、「日本編」、「東洋編」、「東洋陶磁」、「仏教図像」、「アメリカ大陸」、「太平洋」、「ヨーロッパ先史」、「アフリカ」、「エジプト」、「世界の美術館」といった大分類のもと、「ギリシア」、「ローマ・エトルスク」、「中世」などの時代区分、「絵画」、「彫刻」などの表現形式による区分を小分類として、各号単位、または複数号にまたがって連載された。
- 2) 上田修一「美術分野のシソーラス」『美術研究と情報処理：コンピュータによる画廊・文献処理はどこまで可能か』東京、日仏美術学会、1987、p. 76
- 3) 「院展：日本美術院が主催する美術展。⇒日本美術院」や「内輪：アーチやヴォールトを構成する迫石群の下面。⇒アーチ」のように、1行でも解説がなされている項目は、解説文を有する項目として数えた。逆に、「嗚呼絵：鳥譚絵とも書く。⇒戯画」のように表記の違いを紹介している項目や、「外陣：(1) 神社の本殿や寺院の仏堂については ⇒内陣。(2) キリスト教聖堂については ⇒身廊(1)。」のように参照項目が2つ以上に渡る場合に、それぞれの違いを明示している項目は、解説文を有しない項目として数えた。また、「飛鳥・白鳳時代の美術」のように、項目内に「建築」「絵画」「工芸」「書」といったサブカテゴリーを有する項目見出しや、「安陽」のように、項目内に、「一後岡遺跡」「一西北岡殷墓群」「一武官村大墓」「一婦好墓」といったサブ項目を有する項目見出しについては、いずれも1つの項目として数え、サブカテゴリーやサブ項目の数を項目見出しの総数に反映させることはしなかった。
- 4) 検索語の一種としての主題語については、以下を参照。坂本徹朗『日本図書館学講座9 情報検索』東京、雄山閣、1976、p. 63
- 5) 図書館学では、あらかじめ設定されたカテゴリーに基づいて主題語を抽出する。化学分野であれば、「生産物」、「原料」、「反応」、「触媒」、「溶媒」、「操作」、「条件」、「装置」、「測定」、「性質」、「構造」の11のカテゴリーが設定されており、それぞれのカテゴリーに該当する単語がすべて「主題語」と見なされる。同前、p. 69
- 6) 画家や彫刻家、版画家、工芸家、建築家、写真家、書家などの「作者」に該当する項目見出しは「主題を表す項目」の数に含めていない。また、美術史家、考古学者などの研究者、コレクター等も含めていない。こうした操作は、厳密に言えば、アングルが描いた《レオナルド・ダ・ヴィンチの死》や《ラファエロとフォルナリーナ》、レオン・コニエの《死せる娘を描くティントレッ

ト》など、画家伝説が絵画の主題となった19世紀の作例や、矢内原伊作をモチーフとしたジャコメッティの彫刻や絵画を想起するならば、不誠実な対応であると認めざるを得ないが、本研究では、『新潮 世界美術大辞典』の項目解説において、作例に言及のあるもののみを取り上げることを原則とした。したがって、多くの仏僧もまた含まなかったが、頂相や肖像画について言及のあるものは、総数に加えた。

- 7) 佐々木健一『タイトルの魔力』東京, 中央公論新社, 2001, pp. 163-164
- 8) 同上, pp. 167-168
- 9) 森清原編『日本十進分類法 新訂9版 本表編』東京, 日本図書館協会, 1995, p. ix
- 10) Massimiliano Gioni, "Is Everything In My Mind?" *Il Palazzo Enciclopedico*, vol. 1, Venezia, Marsilio, 2013, p. 28
- 11) Massimiliano Gioni, "This Wild Darkness," *Manifesta 5*, Donostia / San Sebastián, Centro Internacional de Cultura Contemporánea, 2004, p. 24
- 12) 2004年6月11日, 11時半～12時半, マニフェスタ5記者会見, クルサール・カンファレンス・ホール・ホワイエ, ドノステア=サン・セバスティアン (Manifesta 5 Opening Press Conference, Kursaal Conference Hall Foyer, Donostia / San Sebastián) にて、筆者聴取。

本稿は、日本学術振興会 平成27-29年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）「国際美術展の企画テーマと出品作品に基づく『現代美術主題分類システム』の構築」（課題番号50346540）による研究成果の一部である。